

第24回人工透析四国研究会

プログラム・抄録集

会期 平成2年10月20日(土)
会場 厚生年金健康福祉センター
サンピア高知
会長 桑原和則
(厚生年金高知リハビリテーション病院)

第24回人工透析四国研究会

目 次

1	服薬管理についての検討 — アンケート調査より —	41
	高知高須病院附属 安芸診療所 梶佐古千草 他	
2	自己管理が困難な患者に対する家庭復帰への援助 — 食事療法を中心にして —	41
	三豊総合病院 腎センター 原 由佳 他	
3	透析中排便の問題点とその対策	42
	回生病院 透析室 西山まゆみ 他	
4	水分管理における問題点と看護について	42
	小松島赤十字病院 尾 嶋 美 恵 他	
5	除水コントローラ導入による看護の変化	43
	高知高須病院 透析室 津野 啓子 他	
6	高齢透析患者の体重増加と QOL との関連性	43
	回生病院 透析室 高 嶋 正 明 他	
7	一人の透析患者とのかかわりを通してケースワーク援助を考える	44
	キナシ大林病院 MSW 松木千枝子	
8	慢性血液透析患者の QOL におけるエリスロポエチンの効果 — 特に活動量と食事摂取状況について —	44
	松山赤十字病院 透析センター 澤田 和 恵 他	
9	精神遅滞者透析導入への援助	45
	香川県立中央病院 腎センター 重成 順子 他	
10	ブラッドアクセスに関連する諸因子の検討 — 看護面より —	45
	高松赤十字病院 腎センター 馬場 綾子 他	

- 11 Check Monitor of Dialysate Flow (CMDF) の試作…………… 46
 広瀬病院 透析室 出 淵 靖 志 他
- 12 単身用 HDF 装置 DBG -01 の使用経験について…………… 46
 三豊総合病院 ME 室 小 森 久 司 他
- 13 HPM ダイアライザーによる β_2 -MG の除去量と維持濃度…………… 47
 高知高須病院 北 代 益 孝 他
- 14 ダイアライザー CL - SU 12 W の臨床評価 (続報)…………… 47
 厚生年金高知リハビリテーション病院 透析室 川 村 浩 他
- 15 骨関節痛症例に対する各種ダイアライザーの使用経験…………… 48
 川島病院 新 納 誠 司 他
- 16 虚血性心疾患を有する慢性血液透析患者の管理について…………… 48
 松山赤十字病院 腎臓内科 岩 本 剛 人 他
- 17 血液透析療法から CAPD への変更により
 狭心症発作の軽減をみた慢性腎不全の一症例…………… 49
 香川医科大学第 2 内科 高 橋 則 尋 他
- 18 糖尿病性腎不全に対する HD と CAPD の比較…………… 49
 小松島赤十字病院 下 江 安 司 他
- 19 Acyclovir 投与中に中枢神経症状をみた透析患者の一例…………… 50
 高知赤十字病院 小 島 圭 二 他
- 20 Veillonella 感染により皮下気腫を呈した一透析症例…………… 50
 香川県立中央病院 内科 山 本 修 平 他
- 21 強皮症患者の透析経験…………… 51
 竹下病院 原 郁 夫 他
- 22 びまん性転移性肺石灰化症を伴った長期透析者の一例…………… 51
 南松山病院 腎センター外科 白 形 昌 人 他

- 23 低血糖性昏睡を来した非糖尿病性慢性血液透析患者の一例…………… 52
 中村市立市民病院 内科 樋口 佑次 他
- 24 当院における精神科的紹介患者の経験…………… 52
 近森病院 泌尿器科 近森 正昭
- 25 透析中に発症した腸間膜動脈血栓症の1例…………… 53
 三豊総合病院 内科 都 岨 和美 他
- 26 長期透析患者の1剖検例より…………… 53
 三豊総合病院 内科 年 森 司 他
- 27 当院における血漿交換療法…………… 54
 市立宇和島病院 透析室 三上由紀子 他
- 28 過去2年間 (Aug. 1988- Sep. 1990) の急性腎不全「15例」の検討…………… 54
 近森病院 泌尿器科 矢 嶋 息 吹 他
- 29 化学発光による好中球活性酸素測定と透析患者への臨床応用…………… 55
 香川成人医学研究所 志 和 正 明 他
- 30 保存期腎不全におけるエリスロポエチンの使用経験…………… 55
 高知高須病院 井 上 善 雄 他
- 31 新しい経口リン吸着剤の長期投与の経験…………… 56
 高松赤十字病院 腎センター 筒 井 信 博 他
- 32 当院における腎移植の現況…………… 56
 高知県立中央病院 腎移植グループ 岡 本 英 之 他
- 33 腎移植後抗リンパ球抗体が関与したと思われる
 急性拒絶反応を来した1例…………… 57
 松山赤十字病院 移植外科 小 野 栄 治 他
- 34 小児の腎移植4例の経験…………… 57
 高知県立中央病院 腎移植グループ 山 本 真 也 他

35 腎移植患者におけるアミロイド, アルミニウム
および鉄の骨沈着に関する臨床的検討..... 58

高知高須病院 泌尿器科 橋本寛文 他

特別講演

「透析患者の骨病変とその対策」..... 58

信楽園病院 鈴木正司

1. 服薬管理についての検討 — アンケート調査より —

高知高須病院附属安芸診療所

梶佐古千草，坂本明美，小松由佳
小松登美

透析患者44名に，服薬状況についてアンケート調査した。23%が一部服薬しておらず，34%が自分の飲んでいる薬が解らないという結果がでた。服薬できない理由としては，①忘れる，面倒である②飲んでも効かない③副作用が心配である④自覚症状がなくなったので中止した⑤沢山でるので飲み間違える等があげられた。又内容の不明な薬としては，骨代謝改善剤，循環器系の薬が多かった。希望としては，手渡す前に必ず説明をし袋に何の薬かを書いてほしい，粉末薬を錠剤にしてほしい等が聞かれた。まとめ：患者と治療サイドで服薬に関する意識のズレがある。服薬率を上げるには，患者個々にあった治療に関する説明及びデーターを交えた服薬指導，服薬状況のチェックが重要と思われる。

2. 自己管理が困難な患者に対する家庭復帰への援助 — 食事療法を中心にして —

三豊総合病院 腎センター

原 由佳，石川公子，山西マサミ

目的：自己管理能力に欠ける透析導入患者に対し，家庭復帰を目標とし，食事が自己管理できるよう援助する。

対象及び方法：患者は62歳女性。病院食の写真や患者の理解力に合わせたパンフレットを作成し，繰り返し指導した。そして，毎日の献立を記録することを習慣づけ栄養士とともに家庭訪問し，摂取量の調査を行いながら指導した。

結果：患者は食事療法ができるようになり家庭復帰という目標を達成することができた。

結論：自己管理が困難と思われる患者においては，患者に合った目標を設定し，能力に応じた指導を繰り返し行なうことが重要である。また，指導を継続させる必要がある。

3. 透析中排便の問題点とその対策

大樹会回生病院

西山まゆみ，三谷享用，市原美津子
富田拓実，三好通子

（目的）透析中排便の減少を図るため，現状の把握及び問題点を検討した。下剤管理不良の患者に個別指導し，効果を検討した。

（方法）当院血液透析患者31名を対象に，平成1年5月～9月迄透析中排便回数，原因を調査し，同年10月に下剤の服用法を個別指導した。11月～平成2年4月迄調査を続けその効果を検討した。（結果）透析中排便経験者は便秘傾向にある者が多く，下剤管理不良が第一の原因であった。下剤服用時刻が一定であれば排便時刻もほぼ一定であるが，服用時刻が不規則な患者は排便時刻が不規則で透析中排便に至ってしまう。特に高齢者や透析歴の浅い人に多かった。

（まとめ）下剤管理は，患者の自主性に任せる部分が多かったが，今回の個別指導である程度の効果を得た。

4. 水分管理における問題点と看護について

小松島赤十字病院

尾嶋美恵，渡辺和子，岩本さき子
内藤由美，一宮智子，久米宏美
新田高子，渡辺恒明

安定期の通院患者37名中，完全社会復帰は12名であり，体重増加率は平均5%未満で，カルノフスキー・スコアも90%以上であった。

部分社会復帰例では，体重増加率が平均6.6%で最も悪く，水分管理を十分することによって完全社会復帰も可能になる例もあると思われるが，エゴグラムではC主導型，逆N型N型に属し療養指導が必ずしも容易ではない。

体重増加率が5%以上の患者に対しては，①5%を越える時に起るであろう症状の認識。②増加率グラフの作成。③次回の増加量の目標値。④塩分制限のための食品知識を家族とともに指導。⑤食品中の水分と塩分量の計算を透析中に行なう。などの教育を実施している。社会復帰の意欲が全くなく，意欲をおこさせることが，困難な例もあった。

5. 除水コントローラ導入による看護の変化

高知高須病院 透析室

津野啓子, 石川小織, 西村香奈
飯田陽子, 吉村多津子

当院では平成1年7月より、除水コントローラを導入と同時に受け持ち看護を取り入れ一年が過ぎた。そこで患者のアンケート調査を行い、61%の患者から看護ができているという意見が聞かれた。今までの機械管理や、業務に追れた看護から、機械管理を透析技師の業務とし、その事により患者との会話を多く持てるようになった。その中で患者の問題点を見出し対策を立案し、次回解決の方向へ持っていく様計画した。このように、患者中心の精神的看護に変わって来た。

6. 高齢透析患者の体重増加とQOLとの関連性

大樹会回生病院 透析室

高嶋正明, 山地和子, 大北澄子
片山治子, 三好通子
同, ソーシャルワーカー
山北勝寛

目的：高齢者の体重増加の原因を、生活状況及びCMIより検討する。対象・方法：65歳以上の男4例、女11例をA群（DWの平均5%以上の不良群）とB群（5%以下の良好群）に分け、身体・生活状況アンケート及びCMI健康調査表を用いて、聞き取り調査を実施した。結果：A群については、水分・塩分に対する理解度の低さが目立ち、自覚症状の訴えも多かった。またCMIにおいて、抑うつ・自殺企図・易怒性などの神経症傾向が強く現れた。これに対してB群は、不安感はあるもののQOLは、ほぼ良好であった。まとめ：患者の理解力・精神状態・幸福感などが自己管理の大きな要因となりうることがわかった。

7. 一人の透析患者とのかかわりを通してケースワーク援助を考える

キナシ大林病院 MSW
松木千枝子, 大林弘子

MSW の役割としては、「患者の抱える経済的、心理的、社会問題の解決、調整を援助し、社会復帰の促進を図る」が挙げられる。

今回は、ひとりの透析患者との関わりを基に、心理的援助について考えた。

娘との葛藤を訴えることで始まったT氏との面接だが、回が重なるにつれ自分を語りはじめた。当初は愁訴の多い心気症状の人と思われたが、周囲から落ち着きや明るさが指摘されるようになってきた——このように、受容的な雰囲気の中で自己を語り、自己を受容できることは落ち着きと安定をもたらす。

MSW の心理的援助とは、患者が病いを受容していくこと、ありのままの自分を受け容れて生きていくことへの援助であるといえるのではないだろうか。

8. 慢性血液透析患者のQOLにおけるエリスロポエチンの効果

— 特に活動量と食事摂取状況について —

松山赤十字病院 透析センター
澤田和恵, 宇部和代, 高岡美樹
加藤安津子, 今城光美, 内田淑子
荻山八寿子, 原田篤実

9. 精神遅滞者透析導入への援助

香川県立中央病院 腎センター

重成順子, 和泉朱美, 檜原 豊
岡 典子, 宮武企余子, 村山克子
蛸子寛子, 山本修平, 三宅 速

目的：透析を拒否する精神遅滞者の、透析導入期における援助のあり方を考察したので報告する。方法：このような患者に対し、以下のような援助を行った。①縁者の協力を得たり、担当スタッフを限定する。②患者の好む話題を取り上げたり、平易な言葉で話し、頑張れたことは誉める。③スキンシップを心がけ、患者の思いを大切にし、スタートに用いるコッヘルを変更する。結果：精神遅滞者の透析受容が得られよりよいコミュニケーションを保ち、安全な透析導入を行い得た。結論①縁者の協力とスタッフの限定により、1対1の関係を作り、精神の安定が得られた。②精神遅滞者では、その患者の精神状態や理解力に応じたよりよいコミュニケーションを形成することが、透析の受容・安定に重要であると思われた。

10. ブラッドアクセスに関連する諸因子の検討

— 看護面より —

高松赤十字病院 腎センター

馬場綾子, 坂上治子, 今竹祥子
逢坂悦子, 奥村真紀子, 市原綾子
大井益子

目的：ブラッドアクセス開存に関与している因子を分析し、今後の看護指導の指針とする。

対象及び方法：58名の慢性透析患者を対象に各期間別に諸因子（透析前血圧、透析中血圧変動、増え幅、CTR、血清総蛋白、血清Na、血清Ca、Ht値）との関連について検討した。

結果：透析前血圧、透析中血圧変動等の諸因子とシャント開存率との間に関連はなかった。しかし、保存期にシャント造設した患者は3か月開存率において有意に良好であった。

結論：シャント開存を良好にするためには、保存期に造設し、十分にシャントを発育させることが重要である。またシャント合併症（狭窄、静脈瘤等）を防ぐための工夫が必要であり、各症例に応じた因子の検討が必要である。

11. Check Monitor of Dialysate Flow(CMDF)の試作

広瀬病院 透析室

出淵靖志, 大鹿雅旦

目的：現在の個人用を含む患者監視装置は、プライミング後、カプラを接続し準備スイッチをONにしなければ透析液は流れないので、この透析液の流し忘れによる事故の可能性がある。これを防止するため、今回、CMDFを考案し試作した。

構造：マイクロスイッチをバイパスコネクター受ブラケット下に固定しカプラをダイライザーに接続するとタイマーが作動し、10分経過し透析液が流れていない場合ブザーが鳴るという仕組みである。透析液の流れはサーミスターを用い、液温にて感知している。

結語：まだ試作使用の段階ではあるが、このCMDFは透析液の流し忘れによる事故の防止に対し有用な装置である。将来的には、透析液供給装置の信号と連動させることにより、確立した装置にしたい。

12. 単身用 HDF 装置 DBG-01 の使用経験について

三豊総合病院 ME 室

小森久司, 福岡和秀

同 内科

広畑 衛, 都寄和美

目的：単身用 HDF 装置 DBG-01の除水精度、補液精度、操作性について検討したので報告する。

方法：HD、HDFモードにおける表示除水量と実際除水量の誤差及びHDFモードの表示補液量と実際補液量の誤差を測定した。

また、スタッフから、操作性等についての意見を聞き集約した。

結果：除水誤差及び補液誤差は、軽度であった。操作性については、多機能を装備し安全性が向上している反面、スタッフの十分な理解と熟練が必要なことがわかった。

考察：本装置の除水精度及び補液精度は高く、従来の装置に比して操作性も良く、多様化する血液浄化療法に十分対応できると考えられる。

13. HPM ダイアライザーによる β_2 -MGの除去量と維持濃度

高知高須病院

北代益孝, 山本真一郎, 西尾隆志
田中 守, 三好裕之

今回我々は、HPM ダイアライザーを使用し、 β_2 -MGの除去量、除去率およびNON-HPM使用群との血中 β_2 -MGの差について検討した。

β_2 -MGの除去量及び除去率（TP補正值）は、AM-UP-10(n=11)75±17mg, 9.3±15.0%, AM-UP-15(n=9)104±24mg, 18.3±11.7%, AM-UP-18(n=10)115±42mg, 20.0±12.0%, TF-1100PH(n=10)66±14mg, 4.9±13.7%, TF-1500PH(n=10)77±10mg, 15.4±14.4%, B1-1.6H(n=5)14±2mg, 35.8±8.7%, FB-150U(n=5)131±11mg, 40.6±6.2%であった。FB-150Uの除去率はB1-1.6H以外のダイアライザーに対して有意差(p<0.01)を認めた。

HPM使用群(n=50)とNON-HPM使用群(n=60)の血中 β_2 -MG濃度は使用后1ヶ月にて5~6mg/lの差(p<0.01)を認め、全員HPMダイアライザーに変更後はこの差を認めなくなった。

14. ダイアライザーCL-SU 12 Wの臨床評価（続報）

厚生年金高知リハビリテーション病院
透析室

川村 浩, 川野雄生, 筒井圭一
加藤 功

合併症の改善にHP膜のHD導入時からの使用が今後、主流になるものと考えられるが長期間の使用については、より選択性の良いダイアライザーの使用が必須であると思われる。今回、我々は8名の長期HD患者を対象にCL-SU 12 WによるHDを約4ヶ月間施行したので、 β_2 -MG及びAlbの除去性能と臨床効果について報告する。

結果、 β_2 -MGの経時的推移では有意に低下した。一方、Albの漏出は認められなかった。臨床効果については、関節痛を有する患者5名中2名に疼痛の消失が認められ又、掻痒感を有する2名に軽減が認められた。以上の事より、CL-SU 12 Wは長期使用に適していると考えられた。

15. 骨関節痛症例に対する各種 ダイアライザーの使用経験

川島病院

新納誠司, 来島政広, 播 一夫

増尾浩司, 水口 潤, 川島 周

三豊総合病院

広畑 衛

対象は安定期慢性血液透析患者のうち透析アミロイドーシスと思われる骨関節痛を呈した18例。透析方法はHF 2例, HDF 4例, HD 12例であった。器種はHFではF-80, FH-88 H, HDFではF-80, PAN 17 DX, HDではPAN 17 DX, SS-12 W・18Wを使用した。

F-80では全例において改善が見られ, FH-88 Hは1例でやや有効, PAN 17 DXの2例では不変, SS-12 W・18 Wでは11例中2例で痛みが消え, 5例で改善が見られた。また, 血中 β_2 -MG濃度は全器種において治療後に低下が見られた。F-80, FH-88 HによるHF・HDF及びSS-12 W・18 WによるHDは, 透析アミロイドーシスによる骨関節痛に有効であると考えられた。

16. 虚血性心疾患を有する慢性 血液透析患者の管理について

松山赤十字病院 腎臓内科

岩本剛人, 武田一人, 久保充明

佐藤 譲, 原田篤実

17. 血液透析療法から CAPD への変更により狭心症発作の軽減をみた慢性腎不全の一症例

香川医科大学 第2内科
高橋則尋, 平尾健一, 湯浅繁一
海部医院
海部泰夫

今回我々は、CAPD への移行により胸痛発作の軽減をみた大動脈弁狭窄症 (AS) を合併する透析 (HD) 患者を経験した。症例は53歳男性、昭和56年慢性腎不全にて HD 導入され、60年頃より胸痛を自覚していた。平成元年5月29日胸痛出現、症状増悪するため、6月2日当科に緊急入院となる。心臓超音波検査・冠動脈造影検査より本症例の胸痛発作は AS による狭心痛と診断された。胸痛発作と HD との関係から HD が胸痛発作の増悪因子と考えられたため、血液浄化法を循環動態に影響の少ない CAPD に変更した。これにより入院中一日当たりの胸痛発作回数は、HD 日0.58回、非 HD 日0.27回に対し CAPD に変更後0.12回に減少した。よって CAPD は本症例に対し有効な方法と思われた。

18. 糖尿病性腎不全に対する HD と CAPD の比較

小松島赤十字病院
下江安司, 阪田章聖, 渡辺恒明
榑 芳和, 大嶺裕賢, 一森敏弘

昭和46年から平成2年8月までに透析療法に導入した糖尿病性腎不全について CAPD 17例、HD 18例を比較検討した。CAPD 導入例は、全例negative selectionであった。臨床検査成績では、Ht 値は CAPD で $26.6 \pm 6.24\%$ 、HD で $24.3 \pm 4.97\%$ で CAPD の方が高値であった。 β_2 -MG は CAPD で $27.3 \pm 11.5 \text{ mg/dl}$ 、HD で $50.8 \pm 24.9 \text{ mg/dl}$ で CAPD の方が低値であった。FBS は CAPD で $181.6 \pm 44.1 \text{ mg/dl}$ 、HD で $227.5 \pm 75.1 \text{ mg/dl}$ 、HbA_{1c} は CAPD で $6.27 \pm 0.55\%$ 、HD で $6.96 \pm 1.53\%$ であった。血糖のコントロールには CAPD の方が有利と思われた。Karnofsky scale による身体活動度に差はなかった。生存率は CAPD で1年76.9%、2年41.7%、3年10%。HD で1年94%、2年83.5%、3年66.7%であった。

19. Acyclovir 投与中に中枢神経症状をみた透析患者の一例

高知赤十字病院

小島圭二, 中村章一郎, 黒川泰史

20. Veillonella 感染により皮下気腫を呈した一透析症例

香川県立中央病院 内科

山本修平, 三宅 速

外科

多胡 護

我々は、免疫不全の知られる血液透析患者において、内シャント部感染を発端に、前胸部の広範な皮下気腫・縦隔気腫を呈した症例を経験した。患者は56才、男性。透析歴7年、その間7回のシャントトラブルを繰り返し、人工血管が使用されていた。動静脈血からの溶連菌が、気腫部膿汁から弱毒性のグラム陰性嫌気性菌である *Veillonella* が培養同定され、これらの混合感染により特異な病態を呈したものと考えられた。クロストリジウム感染に対し、非クロストリジウムによるガス産生性感染症の特徴は、症状が激烈でなく進行が緩徐であり、蜂窩織尖の型をとる為、予想以上に広汎に進行しており重篤な病態を呈する。本邦において、糖尿病症例で数例の報告はあるが、血液透析患者ではなく、稀な症例と思われ報告した。

21. 強皮症患者の透析経験

竹下病院

原 郁夫, 竹下篤範

Steal 症候群により指尖部潰瘍が悪化した強皮症の透析例を経験したので、報告する。

症例：58歳，女性。30歳頃より，レイノ一現象あり。昭和63年12月，咳嗽，呼吸困難にて，他院入院。浮腫，高血圧，蛋白尿，心胸比75%を指摘。エコー上両腎は萎縮し，s-Cr 7.6mg/dlと，慢性腎不全を呈し，平成元年1月，左前腕に内シャントを作成，血液透析に導入。その後，発熱，関節炎，胸膜炎，心膜炎が出現し，元年10月当科入院。強指症，両手末節骨吸収像，肺線維症より，強皮症と診断。抗核抗体陽性（均質型），抗Sel-70抗体，抗セントロメア抗体陰性。プレドニン投与で諸症状は改善したが，2年1月より，左第3指尖潰瘍出現，透析中にSteal 症候群がみられ，潰瘍が悪化した。本例の如く，末梢循環不全がある場合，透析でのその増悪が予測され，CAPD，腎移植を考慮すべきと思われた。

22. びまん性転移性肺石灰化症を伴った長期透析者の一例

南松山病院 腎センター外科

白形昌人, 瀬野晋吾, 藤山 登

尾崎光泰

長期透析患者において，高度な肺の転移性石灰化は，重大な結果を招くとも考えられる。我々は，びまん性転移性肺石灰化症を経験したので，若干の文献的考察も加えて報告する。症例は38才男性。透析歴11年6ヶ月。10年目頃より，胸部X線上，両肺野にびまん性の小粒状影出現。骨シンチにて両肺野に著名なRIの集積像を認め，CTにては肺野全体に斑状のhigh densityな部分あり。転移性肺石灰化と診断。Caxp値の改善及び低P食による血清P値の低下，肺うっ血の改善に努めた結果，胸部X線上，小粒影消失。しかしCT，骨シンチでは，軽度の改善しかみられなかった。この症例では，長期のCaxp値の高値，慢性的な肺うっ血が誘因となったと考えられ，日頃よりの予防策が大切と思われた。

23. 低血糖性昏睡を来した非糖尿病性慢性血液透析患者の一例

中村市立市民病院 内科

樋口佑次, 六浦聖二, 建沼康男

馬庭幸二, 石川聖子

66才, 男性。透析歴8ヶ月。昭和62年7月透析中, 頭痛・発汗多量・血圧上昇(210/90)を来し昏睡となった。血糖値は5 mg/dl, IRI, 70 mcu/ml, CPR, 3.1 ng/mlであった。7日後に2回目の発作(血糖, 17mg/dl, IRI, 113 mcu/ml, CPR, 10.9 ng/ml)があった。腹部CTなどでインスリンノーマは否定され, コルチゾール低下はなく, 肝機能正常, 栄養状態良好, インスリン抗体陰性。2回目発作時GHは1.6 ng/mlと低値だが, GH単独欠損は確診されていない。その後1年余り発作がなく, 初回発作でCPRが上昇していないこと, 局所へパリン化による透析中に発症していることより, プロタミンとインスリンを取り違えたことによる医原性低血糖と考えられるが, 自然発症性低血糖も否定できない。

24. 当院における精神科的紹介患者の経験

近森病院 泌尿器科

近森正昭

高知県の精神病患者が他病で入院治療が必要な時, 当院で治療されます。

最近5年間に精神症状で紹介された透析患者は7名で, 2名は精神病患者ですが, 残りの5名では重症時不適切な治療がおこなわれたための一時的な錯乱でした。

重症の患者では筋肉量が少いため, クレアチニンが低いかからと不十分な透析しかおこなわれず, 意識レベルの低下による不眠や錯乱に対して精神安定剤が使われることで, 昏睡や強い錯乱を生じていました。

重症であれば不安や医療側に対する不信が強く, その場しのぎのごまかしやなぐさめをせず, きちんとした説明が必要で, 不要な薬剤の中止と十分な透析で回復しました。

精神病患者では, 社会復帰のための精神科的援助がおこなわれていなかったため, 異常行動を生じていました。

25. 透析中に発症した腸間膜動脈血栓症の一例

三豊総合病院 内科
都嵯和美, 年森 司, 広畑 衛

症例：57歳，女性。主訴：左下腹部痛，腰部痛。既往歴：昭和53年より慢性腎炎による腎不全で血液透析導入。平成元年9月に右手根管症候群の手術施行。現病歴：数年前より透析中から後にかけて左下腹部から腰部にかけて数時間持続する仙痛を訴えていた。平成2年2月2日透析中に同様の痙痛を訴える。対症的に治療を行うも改善せず2月3日になり腹部CT，x-pにてfree airを認めるため開腹手術を施行。手術所見：S状結腸腸間膜壊死とS状結腸穿孔を認めた。腸管膜動脈血栓症の所見でS状結腸を22cm切除し人工肛門を造設した。経過は良好で現在外来透析中である。結語：intestinal anginaと思われる症状を繰り返し，腸管膜動脈血栓症を発症した一例を報告した。発症前に慎重な透析完理と血栓予防処置が必要であると考えられた。

26. 長期透析患者の一部検例より

三豊総合病院
年森 司, 都嵯和美, 広畑 衛

症例は44歳男性。昭和55年1月より慢性腎不全のため週3回の血液透析を施行していた。平成元年6月21日くも膜下出血にて入院。第20病日に死亡した。今回我々は約9年5ヶ月という長期透析患者の剖検の機会を得たので長期透析患者の合併症と当院での透析患者の死亡統計を報告する。

剖検所見

- 1) 著明な動脈硬化
- 2) 過形成性副甲状腺
- 3) 潜在性甲状腺癌
- 4) 両側性多のう胞化萎縮腎
- 5) 腎性骨異常栄養症

死亡原因は脳血管障害（全て脳出血例）が非常に多かった。また，悪性腫瘍による死亡もみられた。報告によると悪性腫瘍による死亡率も年間約7%台と増加傾向にある。長期透析患者の管理には悪性腫瘍の発生も念頭におく必要があると思われた。

27. 当院における血漿交換療法

市立宇和島病院 透析室
三上由紀子, 鍛冶明美, 木村吉男
茅野利平

当院では、7年前より血漿交換療法が行なわれており、疾患別で見ると、55%が腎移植前後、17%が劇症肝炎、13%が肝疾患、6%が骨髄腫、9%がその他となっています。今年2月に、当院では初のABO血液型不適合腎移植が行なわれ、抗血液型抗体除去の目的で、吸着型血漿交換が行なわれました。OP前3日から、OP当日まで4回施行し、IgM、IgG共に1倍以下となり、腎移植を行ないました。

この吸着型血漿交換では、プライミングボリュームが大の為、低血圧をおこしやすいこと。5時間かかり透析と併用できないこと。免疫グロブリンや補体が低下すると共に、腎移植前で免疫抑制剤を使用していること。移植に対する期待や不安があり、精神的に不安定であることなどの点に留意して、看護援助を行ないました。

28. 過去2年間 (Aug. 1988-Sep. 1990)の急性腎不全〔15例〕の検討

近森病院 泌尿器科
矢嶋息吹, 近森正昭

Aug. 1988から Sep. 1990の2年間に15例の血液浄化療法を必要とした急性腎不全を経験した。男性12例、女性3例で、年齢は21歳から82歳であった。その原因は重複したものが見られるために、腎前性10例（敗血症4例、脱水4例、心筋梗塞3例）、腎性5例（横紋筋融解3例、薬物く造影剤・抗癌剤：ADM + MMC 1例、覚醒剤1例、抗生物質：CEZ + ラッシュクス>など3例、劇症肝炎1例）となっている。その予後は浄化療法を離脱し得たもの8例で、7例は利尿を認める事なく死亡している。急性腎不全を多臓器不全の1分症として考えた場合、他の臓器障害として中枢神経障害4例、心不全3例、肝不全4例、肺不全7例、消化管出血2例など12例が多臓器不全であり、6例が死亡した。肺炎5例、敗血症2例、髄膜炎、肝膿瘍、脳炎各々1例など予後に重大な影響を及ぼす重症感染症が8例に認められ、内5例が死亡した。救命率は、8/15 (53%)であり、治療法改善の余地が示唆された。

29. 化学発光による好中球活性酸素測定と透析患者への臨床応用

香川成人医学研究所
志和正明

大樹会回生病院

横田武彦, 淡河洋一, 松浦達雄

【目的】血液透析患者における好中球 O_2^- 産生能について検討を行った。

【方法】透析患者26名, 健常者23名を対象に, CLA 依存性化学発光法にて測定した。

【結果】透析患者の O_2^- 産生能は, 健常者に比べ有意に高値を示した。また透析中では, 透析開始15分で透析前に比べ有意に高値を示し, 終了時もお高値傾向を示した。透析年数による検討では, 透析1年未満の群で高値を示し, 透析年数が経過するにしたがって低下していた。

【結論】透析患者の O_2^- 産生能の亢進, 透析年数による低下は, 血液透析自体にあることが示唆された。

30. 保存期腎不全におけるエリスロポエチンの使用経験

高知高須病院

井上善雄, 山下元幸, 橋本寛文
竹中 章, 湯浅健司, 寺尾尚民

慢性腎不全保存期で高度の腎性貧血を認めた4例(男性1名, 女性3名, 平均年齢57.25才)に γ -HuEPO 投与を行い, その有用性について検討した。投与方法は3000~6000単位を週1回もしくは, 1500~3000単位を週2回とした。経過観察期間は, 4~23週である。投与前 Ht 値は18~23%で, 投与後4~8週では26~31%と改善を認めている。投与後に BUN, Cre 値の悪化を認めた症例はなく, 1例においては Cre 値の低下も認めている。また高血症の出現や増悪は認めず, 逆に降圧剤の減量を1例に認めた。他に問題となるような副作用, 合併症は認めなかった。

31. 新しい経口リン吸着剤の長期投与の経験

高松赤十字病院 腎センター

筒井信博, 古川敦子, 宮本忠幸
田村雅人, 川西泰夫, 沼田 明
湯浅 誠, 今川章夫

目的：アルミニウムの溶出が少ないリン吸着剤であるペーマイト状結晶性水酸化アルミニウム，PT-A錠の有用性を検討した。

方法：血液透析患者12名にPT-A錠を1年間投与し，各種臨床検査およびメシル酸デフェロキサミン（DFO）負荷試験を行った。

結果：PT-A錠の投与により，血清無機リン濃度はほぼ全期間にわたって有意な低下が認められた。血清アルミニウム濃度は投与16週目より有意に上昇したが，DFO負荷試験は6ヶ月目と12ヶ月目で有意差はなかった。

考察および結論：PT-A錠は経口リン吸着剤として臨床的に極めて有用であると思われた。しかし，わずかではあるが体内でアルミニウムを放出すると考えられ，さらに長期の経過観察が必要であると思われた。

32. 当院における腎移植の現況

高知県立中央病院 腎移植グループ

岡本英之, 中村 達, 三宅 晋
高橋 功, 山本真也, 神原 浩
松田宏明, 間島国博, 武田 功
堀見忠司, 近藤慶二

当院では，腎移植が開始された1986年4月から1990年4月までの過去5年間に62例の生体腎移植術を施行した。腎提供者は男性20例，女性42例で，平均年齢57.9才であった。腎移植者は男性36例，女性26例で，平均年齢34歳であった。腎移植者の移植までの透析期間は，9年以上と3年以下が多かった。また腎提供者の分類としては，親が52例，同胞7例，非血縁者3例であった。3年生着率は85.0%と良好であった。拒絶反応は27例に認められた。腎移植者の合併症として，肺炎をはじめとした感染症・肝障害・高血圧・高血糖などを認めた。以上，当院における腎移植例の現況を報告した。

33. 腎移植後抗リンパ球抗体が関与したと思われる急性拒絶反応を来した1例

松山赤十字病院 移植外科, 腎臓内科
小野栄治, 下門清志, 藤永 裕
岩本剛人, 武田一人, 久保充明
原田篤実

34. 小児の腎移植4例の経験

高知県立中央病院 腎移植グループ
山本真也, 神原 浩, 松田浩明
間島国博, 武田 功, 堀見忠司
近藤慶二, 岡本英之, 中村 達
三宅 晋, 高橋 功

これまで当院で施行された腎移植は69例で、その内15歳以下の小児腎移植は4例である。今回、これら小児腎移植について、小児腎移植の適応や管理の特殊性について検討した。全例、発育低下が認められ、2例は血液透析を導入せずに腎移植を施行した。Donorは父親2例、母親2例であった。術後の付き添いは全例母親で、薬剤の服用に支障はなかった。術後合併症は1例に脳梗塞を来したが、全例移植腎機能は順調で、身長が増加が認められた。以上の詳細について報告した。

35. 腎移植患者におけるアミロイド、アルミニウムおよび鉄の骨沈着に関する臨床的検討

高知高須病院 泌尿器科
橋本寛文, 井上善雄, 山下元幸
竹中 章, 湯浅健司, 寺尾尚民
高知県立中央病院
三宅 晋, 堀見忠司

生体腎移植患者9例に腸骨生検を施行し、アミロイド (Am), アルミニウム (Al), 鉄 (Fe) の沈着性を検討し、Am全例, Al 8例, Fe 5例に陽性所見を得た。Am沈着は移植による改善がみられず、Al, Fe沈着については、移植前、移植後の生検標本、移植後22ヶ月の大腿骨頭手術標本で比較し得た1例でみると、Alは沈着度に差はあるが毎回陽生、Feは移植後陰性であったが手術標本では強陽性とすでに報告しているように骨局在性が証明された。従って、腎移植やDFO療法によるAl, Fe沈着に対する治療効果を骨生検により判定する場合、病態の一部のみをみている可能性があり、誤った結論に至る危険のあることが示された。

特別講演

透析患者の骨病変とその対策

信楽園病院
鈴木正司